



建築家

松村正希さん

まつむら まさき 一九四八年京都府生まれ。京都市立伏見工業高校卒業後、建築事務所勤務を経て独立、現在は莫設計同人社長。二〇〇六年福井大学工学部後期博士課程修了、工学博士。研究テーマは「障害者、高齢者グループホーム型施設の実践的研究」。同学部非常勤講師なども務めた。

障害者や高齢者の施設を造るときテーマは、利用者がいかに元気になるかですね。

それぞれの人に長年の生活で培われた生活感がありま。これを受け継いで人生を継承することが大切なんです。

もうひとつ重要だと考えるのは、それぞれの人には生きていくための役割があることです。その役割をどう見つけて確保していくか、これが非常に大事です。

障害や認知症が重くても、環境を整えば必ず人として豊かに生きていきます。人は衰えてもそれぞれに役割がある。私は施設ではなく、居心地のいい「家」をこそ造りたいのです。

◇ 《松村さんが設計した施設は「〇〇町一丁目」など名付けられた少人数単位の生活空間が確保されている。表札があり玄関があり、台所や洗濯できる場所が身近に備えられる》

食は生活の核

生活とはなにかを考えました。「生」はまず「食べる」こと、「出す、排せつ」、「眠る」ことだと思えます。高齢者らにとっては、どれかが狂ってしまうと命にかかわります。「活」は仕事というか、

環境を整えば生活は豊かに

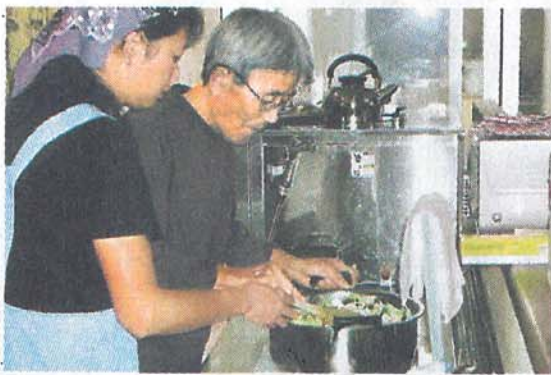
社会とのかかわり、役割ではないですか。食べることは多角的な意味があり生活の核となるものです。「おいしい」と思えば人と語る。喜びがコミュニケーションの幅を広げる。食環境は人が持っている味覚や視覚など五感をよく刺激して、活性化してくれるんです。それが多くの施設で奪われてきた。私はポイントが包丁の音にあると思っています。包丁の音が響く施設を造っているんです。

《若いころから福祉関係の仕事を考えていた。小学生から新聞配達で家計を支えた貧しさの体験が、社会で弱い立場に置かれた人への強い思いをはぐくんできた。設計事務所勤めのころ、休

疑問が出発点

いつも違和感がありました。これは違うんじゃないの、というような。重い認知症の人が生活している場になぜ花が飾ってないの、どうしてこんなに殺風景なの、生活の重要な要素であるべき食事が画一的に用意され、どうしてみんなの目の前で作れないのか、などなど。いつも疑問が出発点にありました。

「息子に変化が見え始めました。声を出して笑うようになりました。何かをしたいと要求も出すようになりました。息子の部屋から台所で調理する人の姿がよく見えます。その姿や炊きのおいしさから食欲も出てくるのではないかと思えます。食事が一人で食べられるようになったのです。住む『家』、そして『食べる』は人間として自ら『生きる力』を生み出す原点であり……」



食事準備にかかりながら役割も見つけていく(京丹後市・第二丹後園、同園提供)

いまやっているのは利用者とのワークショップです。どんな家に住みたい? 包丁を握ってみたい? とかいろいろ問いかけるんですよ。ある女性はピンク色のお風呂が欲しいといいました。それぞれが要求を持って

施設ではなく「家」を造りたい



「人の生命をいかに輝かせるか、建築の仕事で求めていきたい」(写真・遠藤基成)

るんです。これまで彼らの声はないものように扱われてきたと思います。本人たちがどんな暮らしをしたいのか、それが大切なんです。私がかかわった施設で要介護度が改善したり、食べられなかった人が食べられるようになったり、効果が出ているのはうれいすね。いま研究者と連携して、なぜなのか検証を進めています。良い点も悪い点もしっかり明らかにして引き継ぎたいからです。(次回7月6日は、レーシングライダー高杉奈緒子さん)

ともにもま

比較山大阿闍梨 酒井雄武師筆

いのちは、みんなが一つずつ持っている大切な宝です。ともに生きる、いのちある者すべてが、ともにここを通わせ、助け合って、素晴らしい人生を送りたいものです。